

下の句かるたの由来 その3

(夢の続き、北海道のかるた)

1. 北海道で初めて下の句かるたで遊んだのはいつごろ

発祥年（文化文政時代 1804～29）、発祥地（会津若松）が判明した。

しかし北海道に「板かるた」「下の句かるた」を持ち込んだ人は誰か。

未だ謎である。このまま永遠に謎のままだと思うと残念でならない。

今迄の調べでは、明治2年（1869年）に会津藩士が小樽に入港し余市へ移住している。それらの人々から広まったのではと推測していた。

しかし1859年に標津、斜里、紋別が会津藩領となり武士や医師の配置があり生活拠点となっている。当然「板かるた」で遊ぶ機会があったのではと想像する。別の視点で見ると、会津若松では今も身欠きにしんや棒タラ等の海産物を使った料理が郷土料理として残っている。

山間部にある会津若松で何故？と思うのは私だけだろうか。

会津若松市史によると「蝦夷地は米がまったく獲れず、漁業だけが唯一の産業であった」とある。さらに「藩では蝦夷地の経営によってあげた海産物を地元会津へ廻送した。阿賀野川の水運が積極的に利用された。会津へ身欠きにしんやぼうたらが大量に送られるようになったのは、シベツ、シャリ、モンベツが藩領になってからである。明治元年、戊辰戦争による会津藩の敗退は、蝦夷地経営の実績も実らないまま、蝦夷地支配の終焉となった」と記されている。

（会津の幕末維新より）

戊辰戦争時に商魂逞しい人達が残っていなかったのだろうか。

その後現地に残った人達が会津に海産物を送り続けていた事が今も身欠きにしんや棒タラを使った料理が郷土料理として残っていると考えるのは考えすぎだろうか。

そしてこれらの人達が「かるた」を広めてくれたと考えることも出来るのでは。いろいろと想像すると夢は際限なく広がり楽しみが増えていく。

この点を会津若松市立図書館野口館長に電話でお聞きしたところ、網走地区に配置されていた人たちは、戊辰戦争に参戦のため全員引き上げてしまい残った人はいない。また、会津の商人は蝦夷地に行っていない。

現地の人間を使っていた。

身欠きにしんや棒タラは、網走地方が会津藩領になるまえから、北前船で輸送され新潟経由で会津に届いていた。

会津人が北海道に住んだのは、明治2年小樽に入植した人達が最初である。

との回答があり、私の夢も潰えた。 残念である！！

2.今も盛んに遊ばれている下の句

会津で生まれた「板かるた」「下の句かるた」が北海道で大きく育った理由のひとつに、先人が「かるた大会」を開き今日まで継続されてきた事があげられる。たかが「大会」と思うが、大会を開催していたところが「大会」を止めると、不思議と衰退してしまうという事象を数多く見てきた。

反対に大会を行うことで「かるた人口」が増えてきた事例も多々ある。

近年では、その良い例が「北海道こどもかるた大会」である。

年々参加チームが増え、主催者はその運営に大変なご苦労を強いられている。

当然、全道各地にその輪が広がり、各市町村の予選、支庁単位の二次予選と年々規模が大きくなっている。

○ このように「かるた大会」には意外な効用がある。

次世代に引き継ぐ方法としてこれからも大いに活用していきたい。

何にしても子供たちの「かるた人口」が増えてきていることは、頼もしく、明るい未来が見えてきている。誠に嬉しいことである。

3.新聞で見るかるた

夢の続きを見たい。

「板かるた」を誰が持ち込んだのかが分からぬなら、
せめてかるたで遊び始めたのは何時ごろからなのか、
かるた大会は何時ごろ始まったのかを
知りたいとの思いから新聞に報道されているのではと考え調べ始めた。

○ 旭川市立図書館は北海タイムス、道立図書館は小樽新聞が明治20年からの新聞がマイクロフィルムに保存されている。

両紙を調べたところ「かるた」の文字が最初に掲載されたのは下記の通り北海タイムスである。

小樽新聞は明治39年であった。

○ 北海タイムス明治35年1月1日付「聯想」(題)

▲ 正月嗚呼正月、正月とさへ云へば我輩は三年前の正月の事を思ひ出す。
あの時我輩は彼の人と並んで加留多を取って居たことがあったが其の時の心
持つたら無かった、思ひ出してもゾッとする(意中人)とある。(参考資料1)

(1) 広告で見る歌留多 (参考資料 2)

次いで広告の中に歌留多の文字を見つけた。

- 明治 35 年 1 月 5 日付北海タイムス広告欄に新年贈答及娛樂適當品として

● 百人一首かるた 價六十錢 郵稅十錢

と載っており、かるたに関する広告が初めて出てくる。

この後明治 37 年 1 月 27 日付けでも出ているがどうも「紙製かるた」の広告のようである

- 板かるたの広告は大正 11 年 1 月 7 日付北海タイムスに初めて掲載されていた。

木製かるた某書家直筆

百人一首 特価一圓五十錢 送料二十錢

非常に高価なものであったようだ。

この後「板かるた」の広告が目につくようになる。

当時は筆記用具が筆であったろうから、自前の「かるた」が多かった時代。売れ行きはどうだったのか昔の事ながら心配してしまう。

(2) 短歌や俳句に見るかるた (参考資料 3)

- 明治 36 年 1 月 1 日付北海タイムスの和歌投稿欄に

「飛び入りてとる人もあり水にすむ 蛙かうたふ歌かるたとて」
と載っていた。

- 明治 40 年 1 月 5 日付北海タイムス「はいかい歌かるた」欄の俳句に歌留多の文字が出てくる。(参考資料 4)

そして大正 12 年には川柳でも歌われていた。(参考資料 5)

「かるた」が短歌や俳句に歌われるくらい多くの人たちに親しみを覚えるほど遊びであったことが窺える。

(3) 隨筆に見る歌留多

- 明治 36 年 1 月 1 日付北海タイムス「歌かるた曾」なる文章があり、下の句歌留多を痛烈に批判している。(詳細後述)

これらの記事を見ると「下の句かるた」が明治 35~6 年頃には、一般市民に大変な勢いで浸透してきていることが推察できる。

4.かるたに関する面白い記事

- 「下の句」なるが故の批判(参考資料 1 下段歌かるた会)

北海タイムス 明治 36 年 1 月 1 日によると、「下の句かるた」が盛んになり、

なかでも教職員の間で遊ばれていたことに対し批判的な記事が載っていた。

「松の内の遊戯中雙六、縞合、貝おほひ等は一部上流の奥殿に古の面影を存するのみにて廣く世間に行はれず、上下貴賤老幼打交りて殊に多人數樂しみを共にし優雅にして趣味あるは歌『かるた』曾に若くものなしこの遊戯は娛樂の中に我邦神ながりの道なる和歌をおぼゆる益ありて帝國內至る處『秋の田の』の御製を知らざるものなきは實に此遊戯の賜なるとは何人も疑はざる處なるべし然るに本道に行はるゝ歌かるた曾に見るにいずれ下の句のみを讀みて下の句を取るに過ぎして言はゞ片輪の『かるた』曾なり、上の句より讀みて下の句を取れはこそ、『かるた』曾も面白けれ、下の句を讀みて下の句を取る其間何の面白味のあるべき、又これでは三十一文字の風体姿調をおのづから感得する利益をも失ふ道理なり、事遊戯にかゝはりて仰々しく論ふ程のことにはあらざれども諸學校の職員たちまで此片輪曾に加りて豪も怪しむ處なき有様を見るに忍びず一言して優美なる『かるた』曾の完成を期せんするになむ」

と痛烈な批判である。これを見ると批判されるくらい「下の句かるた」が凄く盛んであった事が窺える。

これ以外にも「かるた」に関する批判めいた文書が見受けられる。

(参考資料 6 P1 歌かるたの利害 P2 春遊びの注意等)

当然のことながら「下の句かるた」を讀えたものや(参考資料 6 P2 雪中娛樂法 P5 平凡なかるた)「下の句歌留多の考察」なるものもある(参考資料 6 P6)

5. 下の句かるた大会

北海道に「下の句かるた」を持ち込んだ人は誰か。

何時ごろから「下の句かるた」で遊ぶようになったのか。

今のところ謎である。

北海道のどこかに「懐中記」なるものが存在し日常生活の記録が出てきたならそれらが分かるかもしれない。大いに期待し願っている。

それでは「かるた大会」は何時ごろから始まったのか。

初めてかるた大会に関する記事が載ったのは、明治 39 年 1 月 3 日付小樽新聞である。ただし、記載内容を見る限りでは「上の句」の大会である。

「下の句かるた大会」に関する記事が初めて掲載されたのは明治 39 年 1 月 16 日付小樽新聞に小樽大会が報道されていた。これが最初である。

この頃巷でかるたが盛んに行われ「かるた大会」も多く実施されていたであろうが報道されるほどのものではなかったのかもしれない。

その後「かるた大会」に関する報道があったのは明治 39 年 1 月 17 日付北海タイムスに岩見澤の炭鉱会社が新年会で「かるた会」が催されたことが出ている。(参考資料 7P1)

札幌、旭川、岩見澤では、

札幌は明治 41 年 2 月 1 日付北海タイムスに前日開かれた歌留多曾の模様が報道されていた。(参考資料 7P1)

旭川の全道大会は明治 43 年 1 月に「第一回かるた大会」が実施されたと記されていた。(参考資料 8P1) ところがその後の調べで大正 4 年 2 月 16 日付北海タイムスに第 8 回旭川かるた大会が 2 月 10 日 4 条通 8 丁目山二旭館楼上にて開催されたことが掲載されていたのである。この記事から類推すると明治 42 年若しくはそれ以前に実施されたことになる。

また、明治 45 年 1 月 24 日付北海タイムスに旭川歌留多曾の結果が出ている。札幌や岩見沢等遠方からの参加があり、総数 120 余名と多数が参加している。よくもこれほど多くの人が集まつたものである。

交通事情が決して良いとはいえない時期、かつ厳寒の中「全道大会」と銘打っていないにも関わらず各大会に大変遠いところから多くの人たちが参加している。明治 45 年 2 月 3 日に岩見澤梅ヶ枝倶楽部主催で実施している(明治 45 年 1 月 28 日北海タイムス)(参考資料 7P6) 大会や、明治 45 年の札幌大会には旭川、室蘭、苫小牧、そして釧路が参加している。

同じく明治 45 年の釧路大会には、小樽や旭川からも参加している。

これは実に驚嘆的なことである。

鉄道別・線別・区間別開通一覧(参考資料 9)で交通網を見ると明治 40 年頃には道内の主要な鉄道網は開通していたようである。

明治 36 年 1 月と明治 39 年 4 月の時刻表(参考資料 10)を入手した。

一例として明治 39 年の時刻表で札幌旭川間の所要時間を調べて見ると 5 時間もかかる。しかも直行便が無いので岩見澤で一度、砂川で再び乗り換えてやっと旭川に到着する。乗り換えるための待ち合わせ時間が必要で合計すると 6 時間以上もかかってしまう。

現在の 1 時間 20 分と比べると大変な旅であったことが想像できる。

さらに冬の最中吹雪で汽車が立ち往生することもしばしばあり目的地に着くには大変な難儀であったことであろう。

道内各地で実施された「かたる大会」を参考資料 11 に纏めて見た。

これを見ると明治 45 年頃から盛んに「かるた大会」が実施されていたことが良く分かる。(参考資料 11 北海道に於ける戦前の歌留多大会開催地一覧及び参考資料 7,8 歌留多大会報道記事)

当時のことであり「上の句」も盛んに遊ばれていたようである。

報道記事を見ると「上の句」の単独の大会と「上の句」「下の句」が同一会場で実施されていたことが数多く出ている。

「上の句」の大会は明治 39 年から昭和 5 年頃まで行われていたがその後紙上に出てこない。

6. 最初にかるた大会を開いたところは

それでは北海道で初めて歌留多大会を開いたのは果たしてどこなのだろうか。

当時は現在のように開催回数に余り拘っていなかった様で現在のように、

「第〇〇回かるた大会」

と謳っていないため確かなことが解らない。

それとかるたが盛んであった割には報道記事に乏しく「かるた大会」が何時頃から始まったのか詳しくは分からぬ。

報道されている記事から推考して見る。

①岩見澤

歌留多俱楽部の歴史でも触れるが岩見澤梅ヶ枝俱楽部の創設が明治 38 年 5 月である。大正 3 年「第九回」大正 4 年「第十回」(参考資料 7 大正時代編 P7) との記録が残っている。

この記事をもとに遡ると明治 39 年が「第一回」になる。

俱楽部創設の翌年に「第一回かるた大会」を開催したであろうことは十分考えられる。

②旭川

大正 4 年の新聞記事によると第 8 回と記載されている。前述したとおりこの大会から初回を類推すると明治 42 年或いはそれ以前と考えられる。

明治 45 年以降大正 15 年にかけて色々な市町村で大会が開催(参考資料 11) されている。大正 2 年から開催地が激増しているにも拘らず何故か旭川は大正 2, 3 両年にかるた大会を実施した形跡が見当たらない。

小樽新聞や北海タイムスを何度も繰り返しきりかえし調べて見たが報道されていないのである。

どのような事情があったのか分からぬが大正 2 年と 3 年には旭川で大会が開催されていなかつたようである。

その事を考慮して 8 年間遡ると岩見澤と同じく明治 39 年が初とも考えられるが定かなことは判らない。

明治 42 年頃に開催されていたことは確かなようであるが。

③札幌

明治 41 年 2 月 1 日付北海タイムスで紹介されている。

その記事によると旭川、岩見澤、小樽から約 100 名の選手が集まつたとのこと。

大変大きな大会であったようだ。

当時札幌は歌留多俱楽部が群雄割拠（参考資料 12）し、各俱楽部が独自に大会を開催しているため、初めて大会が開かれたのは何時頃からなのか全く分からぬ。

紙上に於ける実施回数が細切れなのである。

誠に残念なことである。

④小樽

新聞紙上では一番初めに「かるた大会」開催の記事が出ていた。

明治 39 年 1 月 3 日付小樽新聞である。掲載記事は「上の句」であったが、同年 1 月 16 日付小樽新聞に「下の句かるた」の大会が行われた事が記されている。

また大正 2 年 2 月 4 日付北海タイムスに「第 9 回歌留多大会」の結果が載っていた。遡ると明治 38 年が第一回大会となる。

報道を見る限りでは北海道で一番初めに「大会」が開かれたのは小樽ではないかと推察される。

移民状況や北海道一の経済都市として目覚しい発展をしていたことから考えるとどうやら間違いないように思われる。

7. 歌留多俱楽部の歴史

岩見澤梅ヶ枝俱楽部の番場睦喜さんによると明治 38 年に岩見澤梅ヶ枝俱楽部が創設されたと言っている。

根拠は初代会長伊東氏の日記が残っておりその事が書かれているとのこと。

確かに明治 45 年 2 月 7 日付北海タイムスに「會長伊藤氏」と出ており、大正 7 年 3 月 4 日付北海タイムスに「會長伊東泰助氏」と出ている。

(註、番場睦喜さんに「伊とう」さんの「藤」「東」いずれが正しいのか確認したところ、「東」が正しく職業は「医者」との回答であった。初代会長伊東氏は長期間にわたり会長をしていましたが「医者」であることが確認できる記事もある。明治45年の伊藤は誤植と思われる)

日記と新聞記事が符合し明治38年に岩見澤梅ヶ枝俱楽部が創設されたのは間違いないようだ。

道内の歌留多俱楽部の中で岩見澤梅ヶ枝俱楽部が「北海道最古」のものとなる。伝統ある俱楽部が益々発展し末長く存続する事を願うものである。

これ以外では大正10年2月4日付北海タイムスに深川大会が報じられ、主催が深川北陽俱楽部(参考資料7大正時代編P20)となっている。

さらに大正14年3月11日付北海タイムスに瀧川大会が瀧川フレンド主催となっている。(参考資料7大正時代編P27)

深川北陽、瀧川フレンド両俱楽部は共に現存している。

明治、大正時代に出来た俱楽部が今も残っているのは、この3俱楽部のみのようだ。

大正10年以前に創設されたと思われる苫小牧極光俱楽部が、今は廃部となっており誠に残念である。

8.チーム編成の変遷 (参考資料13)

チーム編成を見ると1チーム1人~5人と今では考えられない編成となっている。現在のチーム編成は1チーム3名となっているが、

明治初期には「下の句かるた」でも一対一の大会があったようである。

明治39年の小樽大会は4人編成となっている。4人制の大会はあまり多くなく5人編成が主流であったように見受けられる。

札幌は全道大会の殆どが5人制で実施している。

少年かるた大会は4人制、それ以外の大会は3人制で実施されている。

3人制は大正2年俱知安大会が初お目見えである。

その後多くの大会が3人制で実施している。

報道を見る限り旭川が積極的に導入していたようで、大正12年以降の大会は全て3人制で実施している。

いずれにしても5人制や4人制から3人制へ移行し現在に至っている。

9.ルール

ルールは殆ど現在と変わらないようであるが、チーム編成の違いから一人の持ち札の枚数が違っている。他にも二点ばかり違うようである。

5人制或いは4人制のかるたがどのように行われていたのか大変に興味のあるところである。

現在当時の事を良く知っている人は数少ない。

その一人である旭川の山本実さん(現在93歳)に聞いてみると5人制及び4人制は一人3枚以上であればどのような持ち方をしても良い。一組の中に二名以上持ち札が無くなった時は他の札を一箇所に集めて競技を続行することになっていたとのことである。当然相対する人以外の札は取る事ができない。

これは現行ルールと同じである。

3人制のルールは現在とほとんど変わっていないようである。

ただし「まったく」と「お手付き」が違っていたとのこと。

先輩に聞いたところでは、戦後間もなく「まったく」は無制限で時間との闘いであり故意に時間を引き延ばして試合を有利に展開するチームが結構あったようだ。これでは大会運営上問題ありとして昭和25年北海道かるた連盟発足後深川北陽倶楽部の榎本氏が「まったく」は二声迄と提案し改正となって現在に至っている。

また、お手付きについては、先手有効、後手無効となっていた。

読まれた札を取る前に他の札に触れた場合はお手付きとなるが、読まれた札を

取ってから他の札に触れた場合は「寄せ」と言ってお手付きにならなかった。

北海道歌留多振興会(昭和34年発足、参考資料14)は「かるた道精神に徹し礼儀正しく行動する事を申し合わせし眞に良心的競技を実施する」ことを各倶楽部に提案し、高松宮御観覧記念大会に於いて「正一枚」のルールを初めて適用した。

読まれた札以外に触った時は全て「お手付き」となるルールとなったのである。

その後連盟で「正一枚」が議題となり改正となったとのこと。(旭川市山本実氏談)

ところが驚くべきことに、大正6年2月1日付北海タイムス紙上に小樽大会のルールが「札は正一枚」(参考資料7大正時代編P13)と明示されていたのである。

次項でも触れるが当時は「賞金」が非常に高額のため相当厳格なルールが適用されていたようである。

10.会費及び賞金の変遷

①会費

明治42年の会費は30銭(一人分なのかチームの会費なのかは定かでない)であったが40銭50銭と年々上がっていき、大正8年には一人1円となる。

その後昭和に入り3人一組3円50銭となった。

②賞金

参加料が上るにつれて、賞品から賞金に変わってきてている。

大正 8 年の瀧川大会で初めて賞金総額 20 円と掲載されている。

他主なものをあげると

大正 8 年宗谷大会 一等賞金 15 円。

大正 11 年札幌大会 賞金総額 50 円。

大正 11 年旭川大会 一等賞金 50 円。

大正 15 年札幌大会 賞金総額 200 円と 一挙に跳ね上がった。

その後全道大会の一等賞金は 30 円～50 円と高額賞金の時代となっている。

現在の金額にするとどのくらいになるのだろうか。

かるたで生活をしていた人が居たとも言われている。(函館市山本融氏 80 歳談)

○
賞金制度は昭和 40 年代まで続いていたが北海道歌留多振興会がいち早く賞金制度を廃止し賞品のみとした。他の大会もそれに倣い現在に至っている。

11.かるた大会が消える

戦時色が段々色濃くなり「かるた大会」が出来なくなってきた。

昭和 15 年 1 月 13 日旭川新聞に(参考資料 15)

享樂の世界・銃後の清掃

ダンスは全然法度

その他は自戒に俟つ

戦地の兵隊さんに恥ぢよ

との見出しが大きく踊っている。

灯火管制が引かれ夜の遊びは禁止されたのである。

昭和 13 年が最後となり「かるた大会」の記事が全く見られなくなった。

○
唯一例外として昭和 17 年に「根室戦捷かるた會」が催されている。

「戦捷の春を壽ぎ愈よ團結を固め士氣を昂揚するため根室町青少年團では 1 月 25 日午前 9 時から分團對抗かるた大會を開催する」と旭川新聞に出てる。

開催時間が午前 9 時であって灯火管制に触れないのと、開催主旨から許されたのではと想像する。

また、函館市の山本融さんによると「函館歌留多協会は昭和 11 年から歌留多大會を開催し戦時中といえども一度として休むことなく実施していた」と言っている。(参考資料 11) 山本さんの父親が先頭に立って実施していたので良く知っているようで、電燈に黒い布を掛け明かりが外に漏れないようにして「かるた」をしていたとのことである。

これと似たケースは先輩諸氏から聞いたことがあるが、どこでどのような大会が開かれていたのか具体的なことは全く分からぬ。

灯火管制が引かれると同時に明治時代から続いていた「歌留多大曾」が消えたと言って良いのではないだろうか。

12. 戦後のかるた

戦後かるたの復活は目覚ましいものがある。

一般家庭では冬の遊びとして夜ともなると街のあちこちで読み手の声が響き渡っていた。

その声を聞きつけて見知らぬ人が飛び込んでくる。

家人は「どうぞどうぞ」とあたかも昔から知っている人の如く快く招き入れてくれた。

戦時中の灯火管制で消えた明かりが戻り飛び込んで来た人も老若男女も我を忘れ読み手の声に集中し一晩中楽しんだ。

そこには戦時中の苦労や戦後の貧しい暮らしを忘れ心温まる交感があった。

今ではとても考えられない光景である。

昭和40年代に入るとそのような光景も少しずつ消えていった。

遊びが多様化し子供たちが街角でよく遊んでいた「パッチ」「ビー球」「ベー独楽」等が消えたように「かるた」も子供の世界から消えていった。

玩具店、文房具店、書店、デパート等で売られていた「かるた」が今や見かける事が出来なくなったのである。

13. 戦後のかるた大会

それでは戦後の「かるた大会」はどうなのか。

一般家庭で「かるた」が復活したように「かるた大会」も各地で盛んに行われるようになった。

全道大会になると100チーム以上300名を超える人たちが集まり其れはそれは盛大なものであった。

土曜日の夜8時頃から競技が始まり翌日の午後まで夜を徹してゲームは続いた。それほど盛んであった「かるた大会」も一般家庭から「かるた」が消え始めた頃から徐々に衰退していったのである。

道内のあちこちで行われていた「かるた大会」も現在は極わずかとなってきている。

もう少し具体的な事を知りたいと思い戦後から現在迄の「かるた」の歩みについて新聞記事を頼りに調べ始めた。

驚くべきことに戦後の「かるた大会」の事が意外と分からぬのである。

なぜなら、昭和 20 年迄は一部を除き新聞社の本社が小樽や札幌にあり地方の出来事が支局から本社へ集中していた。

そのため地方で開催された「かるた大会」の状況がつぶさに報道されていた。

ところが戦後になると新聞社の組織が変り地方版なるものができた。

該当する地方の小さな出来事はその地方版に載るようになったのである。

北海道新聞を例にとると、旭川支社で発行するため旭川・上川と北見、空知、十勝地方等の地方版が出来該当する地域のちょっとした出来事は殆どがその欄で報道され、それ以外の地域で実施された「かるた大会」は掲載されなくなつたのである。

そのような訳で旭川市立図書館に保存されているマイクロフィルムでは全道各地で開かれている「かるた大会」の状況を掴めなくなってしまった。

そこで過去に開催された全道大会や現在開催されている大会に関して諸先輩方のご協力を得て「戦後に見る暦年かるた大会開催地並びにかるた関連行事一覧表」(参考資料 16) を作成してみた。少々不備な点があるがそれは今後補完していく。最盛期には「全道大会」が年間 9 回もあつたが、今は年間 6 回に減つてきていている。

かるた人としては実に寂しい限りである。

しかし前述した如く平成 10 年から「北海道子どもかるた大会」(北海道子ども会育成連合会主催) が実施されてからは各地で子どもかるた大会が開かれ年を追うごとにかるた人口が増えてきている。

また、小中学校で「総合的な学習」の中で歴史の授業に「下の句かるたの歴史」を取り入れるところや、同好会・クラブ活動等「下の句かるた」に触れる機会が多くなってきている。さらに公民館や老人俱楽部で子ども達にかるたを指導する場面もしばしばみかける。少しずつ「かるた」の愛好者が増えてきている事を見るにつけ大変嬉しく思う。

旭川赤翼俱楽部も平成 15 年から「こどもかるた大会やかるたに親しむ会」を開催しかるたの普及に努めている。

まだ緒についたばかりで成果らしきものが出てないがその芽は少しづつ膨らみ始めており将来が楽しみである。

今後も回を重ね旭川市が実施していた大会(昭和 27 年～平成 11 年迄 46 回実施)に劣らないよう続けていきたいものである。

14.最後に

明治に始まって現在まで新聞報道記事による「かるたの世界」を見てきた。かるた大会に関する記事は明治 39 年が最初であるが多分これより前に色々な「かるた会」や「大会」が開かれていたんだろうと想像できるが残念ながらそれは分からぬ。

また、明治から昭和 20 年迄道内各地に於いて今回まとめたもの以外で「かるた大会」を開いていたことと思う。

そのことについても残念ながら旭川市立図書館にある資料では調べるすべもなく中途半端に終ってしまった。

いずれにしても「下の句かるた大会」が 100 年以上の輝かしい歴史を有し、現在も多くの人々に愛され伝統文化として受け継がれている。

私達がこよなく愛してやまない「下の句かるた」を今一度見直し、その歴史を織りなしている事に誇りを持ちたい。

一人ひとりがかるた界に貢献出来ることは何かを考え、行動を起こし、何時迄もその火を消さないように最善の努力を尽くしたいものである。

最後に、今回の調査で今まで私達が知りたかった「板かるた」「下の句かるた」の発祥年、発祥地が分かり、北海道における「かるたの歴史」の一端を覗き見ることが出来たことはそれなりの成果があったと考える。

北海道の伝統文化を後世に伝える資料となればこれほど嬉しいことはない。

夢の先をまだまだ見たい。

夢は織りなすもの。

平成 17 年 1 月 2 日
旭川赤翼歌留多俱楽部
会長 宮野 勝